

桜台ビレジ自治会だより

Sakuradai Village

Residents' Association News 令和2年3月号

【発行・編集】桜台ビレジ自治会 担当：2B-103 三輪 090-7018-0601

中止 令和2年「桜を見る会」のご案内

日時 令和2年3月29日（日）11:00～13:00
※雨天の場合は、4月4日（土）11:00～に順延します。

場所 桜台ビレジ 中央階段と通路（青葉区桜台25-1）

【重要】新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止になりました。

住民リレーボイス④ 「戦後の日本の建築史を代表する建築家の一人、桜台ビレジ設計者・内井昭蔵さんのこと」 2B棟 三品隆司さん

建築家・内井昭蔵は、日本の各地に優れた建築物を残しています。彼は住宅建築にも情熱的に力を注ぎ、従来にない新しいスタイルを生み出した開拓者でもありました。桜台ビレジや、同じく当地にある桜台コートビレジは、内井昭蔵が集合住宅の設計に本格的に取り組んだ初期の代表作ともいえる建築物です。そんな我がビレジの設計者に、現在、2B棟にお住まいの三品隆司さん（自営業）が、生前に会われたことがあるとのこと、お話をお聞きしました。

三品さんが東京京橋にあるINAXギャラリー（現LIXILギャラリー）の展示設計や設営に携わっていた1995年頃、日本建築家協会が主催するセミナーがギャラリーで定期的開催されていました。内井さんも幾度かその会合に参加されていて、その折に三品さんは内井さんから桜台ビレジやコートビレジのことなどお聞きする機会を得たそうです。

以下に、建築家のプロフィールを交えて、三品さんが今でも憶えていらっしゃる印象的な言葉のいくつか（赤字の箇所）をご紹介します。

●表情穏やか、誠実な語り口

初めてお会いした内井さんは、物静かで表情は穏やか、その語り口は誠実そのもの。建築家という仕事には、求道的ともいえる揺るぎない信念と使命感を持って取り組んでおられるという印象でした。そのような姿勢と人柄は、おそらく内井さんがクリスチャン（正教徒）であったことと無関係ではないように思います。

●桜台コートビレジ、桜台ビレジについて

「桜台コートビレジは、私の初期の自信作」（直接、お聞きしていませんが、桜台ビレジについても同じお気持ちであったに違いありません）「桜台ビレジも同じだが、傾斜地のため、設計にはかなり苦労があった。…集合住宅という制約の中で、一戸建て住宅のように玄関や中庭がほぼ完全に独立するよう『コートハウス』様式で設計した」コートハウスとは、建物の壁や庭に囲まれた中庭のある様式です。その後の話の流れで、スペイン建築の中庭「パティオ」も話題に上がりました。

古くからお住まいの方の中には憶えておいでの方もいらっしゃるかも知れませんが、じつは、桜台コートビレジと桜台ビレジのどちらも、創建当初は外壁がすべて打ちっ放しコンクリートでした。内井さんによれば、その後、風雨による風化侵食などから建築を守りたいという居住者の希望で、現在のようにモルタルと塗料で表面が覆われることになったそうです。

このような建築の改装や改修については、「あくまで居住者が主体。居住の年月と共に建築そのものも周囲の環境変化に適った調整はされるべき」というご意見でしたが、設計者として、やや残念な気持ちも感じておられる様子でした。一方、「建築の寿命は、メンテナンスにどれだけ予算をかけるかに掛かっている」とも。（この点については、メンテナンスの努力がよく成されている桜台ビレジは「優等生」といえるかもしれません）



写真は「内井昭蔵-健康なる空間（日本の建築家(1)）」より

内井昭蔵（1933～2002）

昭和8年、ニコライ堂の司祭館で生まれる。子供の頃はロシア正教会の形式や祈りの空間の中で育つ。ロシア正教会は極めて伝統や形式を尊重する保守的な宗派。

祖父・河村伊蔵は日本ハリストス正教会の輔祭であり、のちに司祭になった。祖父は建築家でもあり、日本のロシア正教の教会などを設計した。ニコライ堂司祭館他、函館の正ハリストス教会などを設計したのも祖父であった。

父・内井進も建築家。昭蔵は早稲田の建築科を出た後、10年間ほど菊竹清訓（1928～2011）の建築事務所に勤め、その後父の死とともに独立した。

「祈りの空間という特殊な環境で育ち、大きな影響を受けたと思う。…ただ今の私はそれほど熱心なクリスチャンとはいえない」。

●打ちっ放しコンクリートについて

「そもそも石灰岩からつくられるコンクリートは、自然素材と天然素材の中間。……打ちっ放しコンクリートの外壁は多孔質、その性質は建築と外界との境界を曖昧にし、まわりの環境と融合しやすくしていると思う…」

建築家の家に生まれ育った内井さんは、若い頃から、近代建築の三巨匠のひとり、フランク・ロイド・ライト（1867～1959）へ傾倒し、ライトがよく採用した打ちっ放しコンクリートの建築にも注目していました。今ではめずらしくないこの工法を、ライトは20世紀初頭にすでに教会建築において採用し、その後もいくつもの秀作を設計しています。

私の当時の記憶はここまでです。今、もし内井さんが生きておられたら、お聞きしてみたいことが山のようにあります。ただ、今回おおよそ四半世紀前の内井さんとの束の間の会話を思い出す機会を得たことで、今こうして、彼からの贈り物のような美しい建築の一角に居を据えていることの幸せを改めて感じているところです。……ありがとうございました。（内井さんの発言の内容は、記憶を振り絞った末の「意識」「超訳」に近いものです。あしからず 三品）

●「健康な建築」について

内井昭蔵さんは、その発言や数多い著作のなかで「健康な建築」という言葉で御自身の考え方を表明されています。これは、桜台ビレジの設計にも共通した重要な建築理念ともいえるでしょう。

「私は健康な人間生活をするために、また文化をつくるために、建築が健康でなければならないと考えている。建築は人間のいれものである。そのいれものが不健康であれば、人間も不健康にならざるを得ない。健康な建築は、健康を目指す人間によってつくられるべきだ。逆に言えば、つくる自分が常に健康を心掛けねばならない。」『内井昭蔵-健康なる空間（日本の建築家(1)）』から

●内井昭蔵さんの主な著書と関連書籍（関心をお持ちの方へ）

『健康な建築-イマジネイティブな生活空間を求めて』1985年彰国社／『内井昭蔵-健康なる空間 日本の建築家(1)』日本の建築家編集部＝著1985年丸善／『内井昭蔵のディティール-生活空間としての美術館・世田谷美術館』1987年彰国社／『再び健康な建築-生活空間に倫理を求めて』2003年彰国社／『モダニズム建築の軌跡-60年代のアヴァンギャルド』内井昭蔵＝編2003年INAX出版／『別冊新建築-内井昭蔵 日本現代建築家シリーズ2』1981年新建築社／『VA 特別号 内井昭蔵と内井建築設計事務所「こころ」の継承1967-2006』2006年建築画報